



札所をめぐる春

―宗像四国東部霊場と千人参り―

『新修宗像市史』 民俗・美術・建築部会から

春の陽気につつまれる4月上旬、市内のあちこちで赤や水色、黄色や紫といったカラフルな幟(のぼり)がそよ風になびく光景を目にしたことはありませんか。普段は静かなお堂や祠(ほくら)が、幟やお供えの花で飾られ、お参りの人びとでひと時のにぎやかな雰囲気になります。たくさんの方が参加する様子から、この行事は千人参りと呼ばれてきました。

歴史と経緯

聖地をつぎつぎに参詣していく宗教的習俗を一般に巡礼と呼びますが、日本では平安時代末に畿内を中心にまとめられた西国三十三観音巡礼(西国巡礼)や、弘法大師空海にゆかりのある寺院をめぐる四国八十八ヶ所巡礼(四国遍路)がよく知られています。こうした西国巡礼や四国遍路は、全国各地にその様子を模倣した「写し霊場」が多く存在しています。福岡県内の写し霊場ではとくに篠栗霊場が有名ですが、ここ宗像市にも「宗像四国霊場」と「大島八十八ヶ所」があります。このうち、前者の開創は江戸時代の終わりころとされ、福岡(現福津市)に住んでいた人などが発起人となり、各地に施主を募って設置されました。

時代が下り、札所の再編などを経つ

つ、郡中に広がっていた霊場を、釣川を境に東側を「宗像四国東部霊場」、西側を「宗像四国西部霊場」へ区分することが決められ、明治43年には春季と秋季に東西の霊場を交互に回るようになりました。その後、第二次世界大戦後に2年ほど中止されていた時期もあったようですが、このお参りの形態は平成28年度を以て宗像四国西部霊場での千人参りが休止されるまで続けられました。現在では、春季のみ、例年4月5日から8日までの4日間、宗像四国東部霊場での千人参りが行われています。

千人参りを守り、伝える人々

平成最後となった昨年4月に行われた千人参りは、4日間とも晴天に恵

まれました。現在では札所を自家用車で回るようになっており、多い日で約30カ所、4日間を通じてちょうど100カ所ほどを、白装束を着用し、念珠(ねんじゆ)を手にした十数名が巡拝します。札所では、まずお経をあげてお参りしたのち、お接待を受けます。お接待は、札所となっているお堂や祠を祀る地区の住民や個人の手によるものです。お菓子やペットボトルのお茶をはじめ、札所によっては煮物や揚げ物、漬物などの料理を出していただいたりすることもあります。

千人参りは、供養などの宗教的な動機のもとに続けられてきたと考えられますが、右に記した札所での動きのように、参る側と参られる側の両者が揃って成り立つ習俗と言えます。本番当日に備えて現地との調整に奔走する世話人、早朝からお堂を掃除したりお接待の準備をしたりして待つ地区の人びとの姿が、終始なごやかな千人参りの向こうに透けて見えてきます。今では車で移動するため、お参りの人を直接目にする機会はあまりないでしょうが、遠目にもよく映えるカラフルな幟を見つけたら、地域に150年以上も伝えられてきた習俗とそれを守る人びとの姿を思い浮かべていただけたらと思います。

(民俗・美術・建築部会 亀崎敦司)



札所でのお接待の様子



上：花の中の千人参り
(第五十六番札所・祇川)



右：五色の幟(第六番札所・三郎丸)

※写真は、いずれも2019年度の千人参りの様子です。